



さか いくによし
酒井邦嘉

東京大学 大学院総合文化研究科 教授

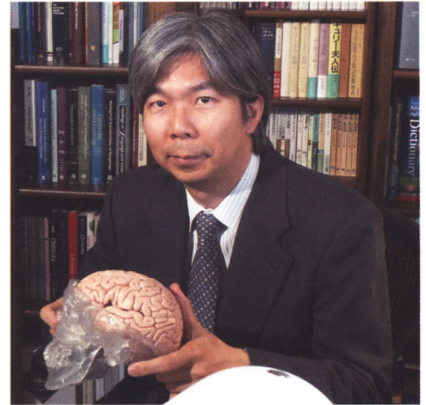
1964年東京生まれ。1987年東京大学理学部卒業、1992年東京大学大学院理学系研究科博士課程修了。1995年ハーバード大学医学部リサーチフェロー、1997年東京大学大学院総合文化研究科助教授、2012年より現職。専門は言語脳科学。著書に『言語の脳科学』、『科学者という仕事』（中公新書）、『脳を創る読書』、近刊『考える教室』（実業之日本社）、『芸術を創る脳』（編者、東京大学出版会）など。

「なんで、私がムラマツに!？」— 村松楽器の編集担当の方から執筆依頼を頂いたときの率直な感想である。なぜなら私はフルートを習い始めて1年あまりの初心者だからだ。訳を尋ねてみると、子どもの時に習っていてレッスンを再開したり、退職後にフルートを始めたりする人は多いが、在職中に習い始めたケースは珍しいからだと思う。フルートの腕はさておき、蘊蓄^{うんちく}だけは豊富になってきたので、素人なりに消化できたことを書いてみたい。

田知洋・千住博の四氏との対談集をまとめている際に、何か新しいことを始めてみたいと考えるようになった。折しも演奏会でフルートのとても美しい音色を耳にして、その奏者の方からレッスンを受け始めたのである。

それからフルート関連の書籍・教本・楽譜を次々と入手して読み込んだ結果、ゴールウェイの『フルートを語る』（シンフォニア、1985）は私のバイブルとなり、モイーズの『フルート入門』（A.Leduc、1935）とワイの『初級用フルート教本（改訂新版）』（音楽之友社、2013）は最良の指導教材となった。今や楽器も映像で学べる時代になったが、それでも紙の本や楽譜の価値が薄れることはないとは私は確信している。

人間の脳はなぜ言語や音楽などを生み出せるのだろうか。その謎に迫るのが私の研究テーマである。フルートは、自然な息がそのまま楽音になるという点で、最も人間の言葉に近い楽器なのだ。実際、約4万年前の笛が出土しており、これが現存する最古の楽器だという。フルートの歴史もまた、人間の思考の軌跡を明らかにしてくれる。西洋では円筒管のルネサンス・フルートから、バロック期に円錐管



のフラウト・トラヴェルソへと発展した。その後、多鍵式フルートを経てベーム式のモダン・フルートに移行してからは170年足らずしか経っておらず、今なお細部の改良が続けられている。（写真は私の愛蔵する楽器の一部）

私が2年あまりを過ごしたボストンは、フルート製作のメッカであった。ヘインズ、パウエルやナガハラがあり、トラヴェルソとりコーダーで有名なフォン・ヒューネの工房がある。日本にも多くのメーカーがあり、ムラマツには既に何度も修理でお世話になり、その高い技術力を知ることとなった。ムラマツの豊富な楽譜の品揃えや、『季刊ムラマツ』の質の高さも特筆すべきことで、さまざまな面から多様な「フルート文化」を支えている。新学級の季節を迎えて、私も新たな気持ちでフルートを吹いてみようと思う。



私は幼少時にヴァイオリンを習っていたが、管楽器とはほとんど縁がなかった。10年ほど前にヴァイオリンのレッスンを再開した頃から、同じく木製のリコーダーやトラヴェルソに関心を持ち始めたように思う。そして『芸術を創る脳』という本（曾我大介・羽生善治・前



ルネサンス・フルートと一鍵式トラヴェルソ（すべて現代の復刻）



多鍵式フルートとモダン・フルート（すべてオリジナル制作楽器）